

**仙台市役所新本庁舎低層部等の一体的利活用に関するシンポジウム
議事録**

日時	令和6年7月6日（土）14時00分～16時00分
会場	IDOBA※動画の同時配信を実施
登壇者	<p>パネリスト：</p> <p>永田 宏和 氏（デザイン・クリエイティブセンター神戸【KIITO】 センター長/NPO 法人プラス・アーツ理事長/株式会社 iop 都市文化創造研究所 代表取締役）</p> <p>内川 亜紀 氏（札幌駅前通まちづくり株式会社 代表取締役社長）</p> <p>馬場 正尊 氏（東北芸術工科大学 教授/株式会社オープン・エー代表取締役・株式会社 Q1 代表取締役）</p> <p>坂本 知靖 （仙台市財政局次長）</p> <p>コーディネーター：榊原 進 （（特非）都市デザインワークス 代表理事）</p>
当日参加者	会場参加者 47 名 + 配信視聴者 44 名

（司会）

仙台市役所新本庁舎低層部等の一体的利活用に関するシンポジウムにご参加いただき、ありがとうございます。

本日、司会を務めます、仙台市本庁舎整備室の山越です。よろしくお願いいたします。本日のシンポジウムですが、新本庁舎の低層部に市民の皆さまが利用いただける機能を入れることで、周辺の空間と一体的に使うということで検討を進めております。本日はこれまでの検討状況や、参考として神戸市の事例の紹介などをさせていただきます。

また、本日この会場とウェブでのハイブリット開催になっております。そして、記録の作成のために、写真撮影と録音をさせていただいておりますので、ご了承くださいますようお願いいたします。本日のシンポジウムについては、仙台市の公式動画チャンネル、せんだい Tube にて、後日公開をさせていただく予定です。また、今日はグラフィックレコーディングも行っておりまして、今日のシンポジウムのまとめということで、分かりやすく周知を図りたいと思っております。そちらも後日市のホームページで公開をさせていただきます。それでは開催にあたりまして、仙台市財政局次長の坂本知靖よりご挨拶を申し上げます。

（坂本氏）

みなさん、こんにちは。仙台市財政局の坂本と申します。今日はお忙しい中、シンポジウムにご参加いただき、ありがとうございます。本来なら立ってご挨拶するべきところですが、オンライン参加の方もいらっしゃるの、座ったままで失礼いたします。

仙台市では平成 28 年度に市役所本庁舎の建て替え方針を決定して以来、市民や有識者の皆さんと議論を重ねながら計画や設計を進めてきました。現在、現庁舎の解体工事がほぼ完了し、4 年後の令和 10 年度の新しい庁舎の着工を目指して、来月から第 1 期工事が本格的に始まります。新しい本庁舎では、1 階と 2 階の低層部を市民に開放し、市民広場と一体的に活用することを検討しています。今回のシンポジウムは、低層部の運営について広く皆さんと情報を共有し、ご意見

をいただく機会とするために開催しました。

今日のシンポジウムでは、昨年度の検討会での議論について、委員を代表して札幌駅前通まちづくり株式会社の内川様と東北芸術工科大学の馬場様にご紹介いただきます。また、本日はデザイン・クリエイティブセンター神戸【KIITO】（以下、KIITO と記載）の永田様もお招きしてお話しいただく予定です。

皆さんにはこのシンポジウムを通じて、新しい市役所本庁舎の低層部の姿をイメージしていただき、さまざまな活動が交わり新たな価値を生み出す協働共創の場の実現に向けて、ご協力をいただければ幸いです。

最後に、本日の開催にご尽力いただいた関係者の皆様、そしてご参加いただいた皆様に感謝を申し上げて、私の挨拶とさせていただきます。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

（司会）

それでは、ここからの進行を都市デザインワークスの榊原さまにお願い致します。では、榊原様お願いします。

（コーディネーター 榊原）

改めまして、こんにちは。今日シンポジウムのコーディネーターを務めます、都市デザインワークスの榊原と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

今日は「協働・共創の場としての低層部」というテーマでお話しします。先ほど坂本さんからも説明がありましたが、このシンポジウムが、新しい本庁舎の低層部について、市民の皆さんに広く知っていただくためのきっかけになればと思います。また、今日の内容はアーカイブ配信もされますので、多くの市民の方に「こんなことができるんだな」と思ってもらえたら嬉しいです。

今後、低層部の運営は民間事業者をお願いする予定ですので、関心のある方には「どんな役割が求められているのか」「何を大切に運営すべきか」などを知っていただけるシンポジウムになればと思います。

では、今日のパネリストの方々を改めてご紹介します。KIITO センター長である永田さんです。永田さんにはミニレクチャーもしていただきます。次に、札幌駅前通まちづくり株式会社の内川さん。そして、昨日 NHK の「プロフェッショナル」に出演された東北芸術工科大学の馬場さんです。最後に、シンポジウムのパネリストとして先ほどご挨拶いただきました、坂本さんにもご登壇いただきます。

現在、市役所本庁舎の解体工事が進んでいて、これからどんどん建設工事が始まります。建物はできるのですが、その中身がどうなるかというのを令和 3 年度から検討しています。令和 3 年度は「仙台市役所新本庁舎低層部等公民連携検討会」で、令和 5 年度には「新本庁舎低層部等一体的利活用検討会」が実施されました。その時の委員が内川さんと馬場さんです。

話し合った内容を全部説明するのは大変なので、どんなことが話し合われてきたかを簡単にご紹介します。まず、一体的利活用エリアはどこかという話ですが、市役所新本庁舎～表小路線～市民広場～つなぎ横丁が一体的利活用エリアと呼ばれています。

令和 10 年度に勾当台公園や表小路線、つなぎ横丁、市役所本庁舎、さらには定禅寺通の再整備が一つの節目を迎え、一体的利活用エリアは民間事業者によって運営される予定です。

現在の市役所本庁舎は市民が積極的に行きたくなる場所ではないかも知れませんが、新しい市役所は市民利用と情報発信の機能を備えたスペースになります。例えば、休日も含めて日常的に

市民が利用できる機能や、天候に左右されない屋根付きの広場ができる予定です。さらに、民間が運営することで、休日のイベント時には表小路線を歩行者天国化し、勾当台公園や市民広場、周辺の道路と一体的に活用することで賑わいを作り、回遊性の向上に寄与できると考えています。

では、具体的にどんなことを実現していけば良いのかについて、令和3年度に馬場さんが座長を務めていた「仙台市役所新本庁舎低層部等公民連携検討会」で話し合われました。この検討会は年4回行われ、その報告書は全てホームページで公開されています。サブタイトルは「新たなチャレンジを育む市役所を目指して」で、ここにチャレンジ精神が込められていると思います。議論の中で特に注目されたのは、市役所低層部と一体的利活用エリアに3つのラボ機能を作るということでした。「リビングラボ」は市民の日常生活に役立つコンテンツを提供する場です。例えば、カフェや飲食店、マルシェ、バスの待合スペース、休憩室などが想定されています。「クロスメディアラボ」は共感型情報発信拠点として、仙台と東北の魅力を発信し、観光情報を提供することが想定されています。「ポリシーラボ」は、開かれた政策検討の場で、市役所職員と市民と一緒に社会課題や都市経営課題について討論できる場が想定されています。

この3つの機能が公民連携検討会で話し合われてきました。そして、一体的利活用エリアの目指す姿として、「①多様な主体が連携した新たな価値の創造や地域課題の解決により、市民サービスの向上につながる空間を創出する」「②まちの賑わいに貢献するため、日常的に市民が集い、交流とゆとりを楽しむ快適な空間を創出する」「③利用者にとって使いやすい環境を目指すため、シームレスな空間づくりや手続きの簡素化を図る」「④公民連携の取組みにより、エリア一体での活動を推進・発信するなど、周辺エリアと相互に賑わいを波及させることで、エリアの価値向上につなげる」の4つが掲げられました。

これらを受けて、昨年度には新本庁舎低層部等一体的利活用検討会（以下、検討会と記載）が、本日の会場でもありますIDOBAで3回行われました。この検討会は「コラボ検討会」という愛称が付けられており、3つのラボ機能を一緒に作っていくという趣旨で進められました。

仙台市から示された目指す姿は、新本庁舎低層部に民間活力を導入して賑わいを創出し、市民広場や表小路線、つなぎ横丁を一体的に活用することで、周辺エリアとの相互波及や街の回遊性を高めるというものでした。また、多様な活動が交わり、新たな価値を生み出す協働・共創の場を目指すことも明確にうたわれています。

検討会でいろいろ議論した内容をビジュアルで示した方がわかりやすいだろうということで、イメージパースを作成しました。鳥瞰図が2カット、アイレベルが7カット、平日と休日のイベント時など、様々な空間を一体的に利活用する様子を表現したものです。公共空間が一体的に使われることでエリア全体がどうなるか、また、公園や道路などがシームレスに連携する様子を描きました。今回は音楽イベントをテーマにして作成しました。

まず、鳥瞰パースでは一番町四丁目商店街の上から定禅寺通～つなぎ横丁～市民広場～市役所低層部が一体的に利活用されている様子を描きました。平日と休日の2種類を作成しています。アイレベルでは、矢印で示した5つの場所の様子を描きました。これらのパースは後ほど仙台市ホームページに公開するので、ぜひご覧ください。

1つ目のイメージは、一番町四丁目商店街から定禅寺通、つなぎ横丁、市民広場を一望した休日のイベント時の様子です。軸線が明確に見えると思います。ここが市役所で、定禅寺通、一番町四丁目商店街からつなぎ横丁まで描かれています。解説版もありますので、詳しくは後ほどご

覧ください。2つ目は、一番町四丁目商店街の同じアングルから平日の様子を描いたものです。休日ほど混んでいないかもしれませんが、低層部に人がいる様子や、令和10年度に完成予定の第一生命さんの黒ビル建て替え後の広がる歩道空間も含めて描いています。3つ目は、市役所と市民広場を挟む表小路線の休日のイベントのイメージです。車両通行止めにして、市民広場で音楽イベントが行われ、表小路線にも小さなステージがあるというイメージです。4つ目は、低層部の2階から商店街を見ているアングルで、休日のイベント時の様子を描いたものです。5つ目は同じアングルで平日の様子です。6つ目は、つなぎ横丁から市民広場を眺めるアングルで、休日のイベント時の様子を描いたものです。夜のイメージも含めています。つなぎ横丁を市役所側から見たときの休日のイベントのイメージもあります。夜になると平日よりもしっとりした雰囲気になることを描いています。さらに、本庁舎の北側にも広場ができる予定で、その広場のイメージパースも作成しています。

こういうイメージを持ちながら進めていくということですが、先ほどのコラボ検討会では「これで完成じゃないよね」と話しました。「こうなったらもっといいんじゃないか」という声をもっと集めていきたいと思っています。このパースもまだまだ成長していくイメージです。そして、これをどうやって実現していくのかについて、検討会で話し合いました。

大きく挙げたのは3つです。まず、民間事業者が低層部とその他の一体的利活用エリアの運営を行うこと。そして、低層部を運営する民間事業者だけでなく周辺の関係者を含めた協議組織が必要だということ。最後に、道路や公園、庁舎などの担当部署が違うことで使い勝手が悪くならないよう、行政窓口を一本化することがポイントだと話し合いました。それ以外にも、検討会では多くの意見が出ているので、それらをまとめていこうとしています。

仙台市との連携だけでなく、周辺との連携も重要で、そのための協議組織をしっかり作っていこうと話し合いました。今後の進め方ですが、今年度中にシンポジウムを皮切りに協議組織の設立準備会を進めていきます。同時に、低層部の運営を担う民間事業者の選定に向けた検討も進めています。令和8年度には低層部を運営する民間事業者が決まり、令和12年度の開業に向けて協議組織を立ち上げる流れです。

コラボ検討会では今後の課題も7つ挙げられ、その中で市民や地域関係者への情報発信と意識向上がとても大切だという意見がありました。その一環として、今回のシンポジウム開催も含まれています。

では、内川さん、馬場さんから、私の説明に対する補足とおすすめのパースについて一言ずついただけますか？まずは内川さんからお願いします。

(内川氏)

まず、パースについて話します。5番ですね。このパースは、子どもたちが市役所の中を散歩している風景が描かれていて、とても素敵だと思いました。それに、いろんな日常的なアクティビティが生まれているのが、いいなと思います。私は普段札幌で、札幌駅前通地下歩行空間の広場部分と札幌市北3条広場の運営をしています。昨年度の検討会では、その視点から、普段札幌市と協議していることをお話しさせていただきました。

今回の低層部の運営にあたっては、単に施設の運営だけでなく、まちに広がりを持たせるための協議組織と運営を担う民間事業者が必要だと思います。運営する民間事業者の皆さんと協議しながら、どんなふうに運営するかを決めていくのが重要です。その際、市民の皆さんや利用者と

のやりとりも大事ですが、それを支える応援団を作る必要があります。そういう協議組織を作るのはどうでしょうかと提案しました。今回の事業はとても新しいチャレンジなので、そのチャレンジを多くの人に理解してもらうことが大切だと思います。

(馬場氏)

はい、僕も。パースの3番目ですね。これです。表小路線の車が止められて、市役所の低層部と市民広場が一体化して使われているシーンです。このパースには仙台市の意気込みが詰まっていると感じたので選びました。実は、数年前の委員会で「チャレンジ」というキーワードを掲げていた時から、自分は検討に参加してきました。

その時にすごく議論になったのが、市役所の低層部が市民に開かれて、市民広場とつながっているなら、もし自分たちが運営を担う民間事業者なら、間にある表小路線も含めて一体化して使いたいよね、一つのつながった公園のように利用できたら全く違う景色が見えるんじゃないか、ということでした。表小路線の車を止めることは都市計画的にも難しいことですが、それを実現しようという意見を言い続けてきたところ、仙台市は実際に社会実験として表小路線を止めて一体的に利用する風景を実現したんですよね。これは素晴らしいと思いました。

もしこれが日常的に「いいね」となれば、本当に公園化するかもしれません。市民の総意と安全性、車の不便さなどの問題をクリアできれば、これは実現するかもしれない。そして、仙台市がそこに積極的に踏み込んできたというのは素晴らしいことです。これは仙台市のチャレンジを象徴する一枚だなと思い、これを選びました。

あと、夜のパースもしっとりした雰囲気です。夜には市役所の前に屋台が出て、飲んだりできる風景って、市民度やまちの安全性を象徴するものになるんじゃないかと思います。日本の市役所の前でこんなことをやっているところはないと思います。もし仙台市が最初にやったら、これは相当バズると思います。市民たちが市民のためにこの風景を実現しようとしているなら、それは本当に市民プライドの表れだと思います。

このプロジェクトの特徴は、一体的利活用エリアを民間企業が運営、さらに踏み込んで経営までしようとしている点です。これはとても画期的だと思います。新しい公民連携の運営風景がここで見られるかもしれません。

(コーディネーター 榊原)

仙台市の本気度が見えるという話がありましたが、これまでの経緯も含めて坂本さんからコメントをお願いします。

(坂本氏)

ありがとうございます。まず、平成28年度からこの市役所建て替えのプロジェクトが始まり、基本計画や基本構想、基本計画と進んできました。その中で、市民の皆さんと一緒に、まちと共に新しい時代に向けてチャレンジする市役所を作りたいというコンセプトを掲げてきました。その一つとして、低層部に市民が集まり交流できる場所を作ろうという計画があります。

私は検討会にオブザーバーとして参加してきましたが、皆さまの議論を聞いていて、一番印象に残っているのは、変化し続けていかなければならないということです。行政は計画を立ててその通りに進めることが多いですが、特にこの変化の激しい時代においては、皆さんの意見や思いを取り入れて、具体化しきような場になれば良いと思っています。

(コーディネーター 榊原)

ありがとうございます。それでは、ここから KIITO センター長の永田さんからミニレクチャーをいただきます。永田さん、よろしくお願いします。

(永田氏)

皆さん、改めましてこんにちは。まずは話を聞いていて少し感想を述べさせていただきます。都市の中心部にある市役所は不動産的に見ると1・2階の低層階の価値が一番高いので、通常は商業機能で埋め尽くされるのが普通です。それを計画段階から市民に開放しようとしているのは、素晴らしいチャレンジだと思いました。

もう一点感じたのは、これから KIITO の活動を紹介しますが、よく「交流スペース」とか「交流ルーム」という言葉がありますが、正直、少し薄っぺらい感じがします。つまり、交流スペースを作ったからといって、必ずしも交流が生まれるわけではありません。今の世の中、人々はつながっているようで実際にはつながっていないことが多いので、「つなぐこと」が大切だと思います。私の言葉で言うと「種」というのが、人と人をつなぐ場やプログラムという意味でとても重要だと思っています。

また、文脈が大事だという話がありましたが、すでにそのことを理解されていて、この場に KIITO の活動を参考に呼んでいただいたことに感謝しています。私たち KIITO が12年間に渡って行ってきた様々な活動は、結果としての交流を生み出すためのプロジェクトばかりなので、今日はそれらの紹介をさせていただきたいと思います。

神戸市も今、市役所を建て替えていて、市民利用空間が低層部につくられる予定なのですが、そこがどんな風になるのか私たちも気になっています。今日はその参考になりそうな様々な話を聞いて勉強させていただければと思います。

それではここからレクチャーを始めたいと思います。今日は時間があまりないので、簡単に話しますが、私は NPO 法人プラス・アーツという団体で防災教育も行っています。イザ！カエルキャラバンという楽しい防災訓練を作り、全国や海外で展開しています。そんな話もご紹介したいのですが、今日は KIITO の話に集中してお話ししたいと思います。

馬場さんはバリバリの建築家ですが、僕も一応建築家で、一級建築士の資格も持っています。でも普段設計はしていません。前職ではゼネコンにいましたが、ハードを作ることにあまり興味が無いのにハード屋に行ってしまったので、正直失敗したなと思いました。今はハードをつくる仕事にも関わっていますが、主にソフトというかプログラムや活動を作る企画・プロデュースの仕事をしています。

最初に大事な話をしたいと思いますが、「地域豊穡化」と「風」「水」「種」の話をして。「地域豊穡化」とは、今は人口減少時代なので、人口増や賑わいづくりを目指す「地域活性化」を目指すのではなく、地域に暮らす人がみんな元気で生き生き活動し、豊かな街になることを目指そうという考えです。そのためには、「風の人」「水の人」「土の人」という3つの役割が必要で、その3つをつなぐところに介在しているのが「種」です。「土の人」は地域に住む動かない存在で、地域住民です。昔は地域コミュニティがあって豊かでしたが、今は希薄だったり崩壊気味で枯れてしまっているので、種（活動）を植えても芽が出ない（うまくいかない）という状況です。そのため、種（活動）を品種改良して強い種を作る必要があります。強い種を作る人が地域にいればいいですが、専門性が高いので、外にいる専門家である「風の人」が強い種を作り、風に乗せて運んで来て、その種に「水の人」が水をやって育てる必要があります。地域の応援団である町内会

や各種団体、公民館や児童館、NPO や役所の人たちがその役割を果たします。良い種とは何だろうということですが、2つポイントがあると思います。一つは不完全である方が良いということです。作り込みすぎると参加者がお客さんになってしまうので、プロセスに参加できるような「関わり代」が必要です。お祭りをやるから来てね、のような関わり代がないものではなく、お祭りを一緒につくろうよというアプローチから始めるべきだと思います、さらに一緒に活動をつくることの入り口を魅力的にしないと誰にも見向きされないのが、クリエイティブの力が大切です。デザインももちろん使いますが、既成概念にとらわれない新しい発想を組み込むなど、クリエイティブな思考の方がより重要です。

まず、KIITO って何なのか説明しないとイケませんね。KIITO は元々生糸の品質検査工場だったんです。生糸の品質検査をするための工場であったという歴史から施設名の由来が来ています。施設自体は14,000平方メートルもあって、かなり大きいです。100年近い歴史があって、大ホールやギャラリー、会議室もあります。そして、クリエイターのためのラボやスタジオが43室もあって、クリエイターたちがたくさん入居していて、彼らと様々なプロジェクトでコラボしています。最近では、2階に市立図書館が仮移転してきて、3階には「KIITO:300 (キイト サンマルマル)」という子どもの創造教育のスペースや、地域活動家のためのクリエイティブな支援センターもできました。開館ときに掲げたスローガンは「みんながクリエイティブになる、その時代の中心になる」でした。これは、子どもから高齢者まで市民全員がクリエイティブになるためのセンターを目指そうという意味です。あらゆる世代を対象に創造人材を育てる教育拠点を目指しています。

KIITO は“風”で地域豊穡化を目指して活動を続けていて、それは神戸市民のためです。私たちが作った“種”に誰が水をやってくれるのかということ、市役所や区役所、NPO とか地域団体がその役割を果たしてくれます。みんな水をやる準備はできていますが、まだまだ強い種が足りない状態です。

コンセプトは「+クリエイティブ」で、社会課題にクリエイティブを注入することを目指しています。様々な分野の社会課題を全包围網的にカバーしています。

最近、いい活動をつくるために大事にしていることがあって、一言で言うと、ゴールにばかり目を向けがちなんですよ。イベントの日が重要だと考えてしまう。そうすると活動の成果は結局、集客やメディア露出に終始してしまう。でも私たちがつくる活動はその先を考えています。“活動”で大切なのはプロセスですから、その活動をつくった後で、どれだけ豊かに社会や地域が変わっていくかが重要です。人を育てていけば、その人がイベントで成果を出して、さらに活躍し始めますよね。他にも、例えば防災訓練を楽しい活動に変えてトライアルして成果が出れば、その後その活動は全国に広がる。KIITO はそういうことをやらなきゃいけない。もちろん市民の税金で運営されている施設ですからその意識でやっています。今から KIITO の代表的な活動をざっと紹介しますね。

まず、子どもの創造教育を本気でやっていて、街で活躍しているクリエイターである、建築家・デザイナー・シェフと一緒に、子どもが夢の街をつくる「ちびっこうべ」というプログラムをやっています。今年も開催します。どんなものか映像を見てください。これはコロナ前の頃の映像で、夏休みから始まるんですけど、ワークショップを重ねていって、クリエイターたちは先生というよりは一緒に寄り添って盛り上げてくれています。飲食店をみんなで作るので、建築チーム

がスケッチして模型を作り、デザイナーチームがロゴマークを作り、シェフチームは神戸の名だたるシェフたちが参加して、一緒に料理を考えます。そうするとお店ができますよね。飲食店だけでは街にならないので、映画館や新聞社、ラジオ局もあります。いわばキッサニアのようですが、キッサニアはすべて街が完成しているのに対して、ちびっこうべでは街をすべてゼロから作り上げるところから始まります。クリエイティブな面でも子どもたちは楽しいと思いますが、やっぱり「夢」のまちをつくるというのが一番魅力的なんだと思います。このプログラムに関しては、クリエイターに協力を呼びかけたところ、みんな二つ返事で引き受けてくれました。報酬はお支払いできないのですがみんな思いを持って協力してくれています。建築教育やデザイン教育、料理の発想や技術の習得の一環として、子どもの街を作るプロセスの中で学んでいきます。キッサニアを参考にした部分もあり、ハローワークに並んでお仕事をもらってアルバイトし、「キート」という通貨をもらって買い物をします。お仕事体験のブースは地元企業もサポートしてくれています。

この活動がきっかけで、おじいちゃんに関する社会課題解決の取り組みも始まりました。今、社会的に大きな問題になっているのが、リタイアして居場所がないおじいちゃんたちの社会的孤独の問題です。暇を持て余して自宅でテレビばかり見ている人が多く、家にいるおじいちゃんたちが会社にいる時の癖で奥さんに指示ばかりして関係が悪化し、熟年離婚も増えているそうです。何とかできないかと考え、おじいちゃんがプロ級のパンを焼けるようになったらどうだろうかと妄想を広げ事業を始めました。今では「パンじい」と呼ばれて全国区です。映像を見てください。神戸はパンの街なので、パン屋さんが多く、パンづくりを教えるのに長けたシェフがたくさんいます。彼らが先生役となっておじいちゃんたちにパンの製造技術を教えています。この場面は初日の様子で、2回の教室程度で美味しいパンを焼けるようになります。暇で時間がたっぷりあるので、家で熱心に自主練を重ねていきどんどん上達するようです。家にいるおばあちゃんの文句も「テレビばかり見てないで」から「パンばかり焼かないで」に変わるそうです。僕たちは各地区の社会福祉協議会の方々と組んで、パンじいのデビューする場所も決めています。みんなパンじいが育つのを待っていて、一緒に活動をしたがっています。パンじいだけでなく、カレーじいやコーヒーじい、マドレーヌじいも育てました。将来的にはピザじいも計画中です。さらにシェフがいなくても展開できるモデルを作ろうと考えていて、パンじいが先生役になって子どもたちに教えながら一緒にパンを作ります。つくったパンを売る屋台をデコレーションする過程で子どもたちはデザイナーにもなります。場の作り方次第でどんな人でも巻き込む可能性が無限にあり、みんながプレイヤーになれると僕たちは考えています。

次に、ラボの話をしてしまおう。ポリシー・ラボに関しては、ずばり「風の人」を育てるプログラムを展開するべきだと思います。僕たちはKIITOで市民を「風の人」にするためにゼミを実施しています。このゼミのキャッチコピーは「正しい答えより楽しい答えがより正解です」です。ゼミを運営するなかで、一番盛り上がっているチームからイノベーションが生まれるんです。本当に悪ノリするぐらい盛り上がる方がグループワークとしてはちょうどいいといつも話しています。これまで39回のゼミを行ってきて、そのうち25以上のゼミで考案されたアクションプランがプロジェクト化して実現しています。結構打率が高いんです。神戸市の様々な部局から幅広い課題が持ち込まれるんですが、僕は持ち込まれる個々の部局の専門家じゃないので、解き方や考え方、リサーチの方法は教えますが、専門的な課題はその部局の人に話してもらいます。自治体の部局

の様子を見てみると、局内で課題があっても、誰に相談すればいいのかわからず、悶々としている職員が多いように感じます。そういった人たちにとってパートナーになれるかが重要なんです。

ゼミの成果の事例ですが、例えば、安藤忠雄さんの設計した兵庫県立美術館の屋上に「ミカエル」というカエルのバルーンアートのオブジェが設置されていて、予算ゼロの状況で、このカエルのオブジェを使って道を賑やかにして活性化できないかというアクションプランが提案されました。グラフィックデザイナーが入っているチームがこのバルーンアートのカエルを小さくして道沿いに並べたいという提案を最初考えたのですが、著作権や費用の問題で NG になりました。そこでオブジェ（立体）としての展開ではなく、カラフルなカエルに使われている 6 色のカラーで図柄（平面）にしての展開にしてみたら面白い結果になりました。予算ゼロで、図柄のパナーは県立美術館の予算で道沿いに吊られることになり、阪神電車が駅をこの図柄でラッピングし、宝くじ売り場やコカコーラの自販機も便乗して図柄でラッピングされました。駅前広場の床面には灘区の予算で地元の子どもたちを集めて図柄がペインティングされました。この様子を見て僕は、誰かが旗を掲げたら、それを掴みたい、応援したいという人は潜在的にたくさんいるんだなと感じました。誰かが旗を掲げることの重要性を感じたプロジェクトです。

これも全国区になりましたが、「ふれあいオープン喫茶」というプロジェクトがあります。高齢者が一人で引きこもって孤独にならないようにするためのアクションプランです。ゼミでアイデアを出し合い、老々介護のような状態になっている「ふれあい喫茶」を地域の子どもたちが手伝えばいいじゃないかという提案が生まれました。夏休みや年に数回でもいいので、こうした多世代交流型のふれあい喫茶が行われ、そこに地域のいろんな人が集まり、本当の交流が生まれ、その後の地域の日常的なつながりへと発展していくことをめざしたものです。お金をかけずに実施する方法もいろいろ考案されながらこのアイデアは全国に広がっています。

最後の事例は街区公園をテーマにしたゼミです。街中の小さな公園（街区公園）がほとんど使われていないので、何とかしたいという話が市の公園関連の部局から持ち込まれました。ある大学生が「熱々ピザを食べられたら行くかもしれない」と発言したことがきっかけとなり、チームのみんなで作った仮設のピザ窯を調べて、材料を購入し、ピザ窯を作り、本当にピザを焼いてみたくてですね。そうしたら本当に美味しいピザが焼けることがわかり、それがプロジェクト化してトライアルイベントとして市内のオールドタウン化している団地に仮設のピザ窯を持ち込み、ピザイベントを開催しました。そうしたところ普段はほとんど人気のない街区公園に地域の多くの人が集まり大成功しました。その後、このピザ窯セットは貸し出されるようになり、どこに持って行ってピザイベントを開催しても地域の人々が最低 100 人は来るといった都市伝説のような状況になりました。これも今では全国区です。今では、ピザイベントをやってみたいという方たちのためにマニュアルを作り、窯の材料や作り方、ピザの生地のレシピまで掲載してお配りしています。

ゼミでは色や形の方のデザインを導入することももちろんありますが、それよりも、クリエイティブな発想やアイデアを持ち込むことで、変わらないものや動かないものを変える可能性があることを学んでもらっています。市民の誰もが発案者やプレイヤーになれるんです。神戸市内の公園を舞台に発足したピザ部もその一例で、部員の 8 割はこれまで全くまちづくりの活動に参加したことがない人たちなんです。趣味や興味で集まるいわゆる「まちの部活動」の可能性が広がっていると感じます。

市民がこういったクリエイティブ思考を発揮するようになって、市の職員が理解しないと協

働できないので、僕は神戸市の職員研修所と組んで「クリエイティブ思考」について学ぶ研修を実施しています。コロナの影響で様々な階層別に行っていた研修はほとんどなくなってしまいましたが、ここにきてようやく少しずつ復活してきています。KIITO で市民対象の創造人材育成を行いつつ、行政職員のクリエイティブ思考研修も並行して行っているのですが、僕はその両方が大事だと思っています。以上です。ご清聴いただきありがとうございました。

(コーディネーター榊原)

ありがとうございました。ちょっと確認したいんですが、先ほどの「+クリエイティブゼミ」は、神戸市のいろんな部署の人たちが「こんなことに困っているから一緒に解決してほしい」と持ち込む場ということでしたよね。ゼミに参加する人たちはどんな人たちなんですか？

(永田氏)

ゼミ生は、社会人、大学生、高校生、主婦、そして高齢者の方も来ます。本当に幅広い層が参加しています。テーマは、基本的には各部署が持ち込む場合が多いのですが、私たちが独自の視点でテーマを設定して、関連する部局に協力を要請する場合があります。例えば、今はゼミで継続して空き家問題に取り組んでいて、自分たちで空き家を借りて KIITO のサテライトのようなものをつくって活動しています。そうすると、空き家問題を担当する庁内の部局の職員も一緒に課題に取り組んでくれます。このように、様々な分野の課題に広く取り組んでいます。

(コーディネーター榊原)

ありがとうございます。もっと質問したいことがたくさんあるのですが、次はパネルディスカッションに移りたいと思います。パネルディスカッションでは、会場の方やオンライン参加者からの質問を受け付けます。今の永田さんのミニレクチャーに関する質問でも良いですし、登壇者への質問でも構いません。質問はスマホで送っていただいても良いですし、分からない方は手を挙げていただければ紙でも受け付けますので、ぜひご参加ください。

それでは、このままパネルディスカッションを始めたいと思います。まずは永田さんのレクチャーに対する感想や質問をテーマに進めていきたいと思います。では、坂本さんから永田さんのレクチャーを聞いての感想や質問があればお願いします。

(坂本氏)

行政職員にとって、いろんな社会課題がある中で KIITO に行政課題を持ち込んで一緒に解決していくという取り組みが始まったきっかけは何ですか。全国で市民協働の取り組みはよく言われていますが、KIITO の活動がどうやって生まれて、どのように育っていったのか、概要を教えてくださいませんか。

(永田氏)

先ほど話した「+クリエイティブゼミ」について、いろんな部局からの相談があると言いましたが、これにはきっかけがあります。それが最後に紹介した階層別の職員研修です。この研修が結構重要な役割を果たしています。例えば、課長昇任研修や 5 年目研修などがあり、5 年目研修では 1 日に対象となる 300 人を超える職員が研修に参加します。KIITO がこういった研修を担当し、KIITO の機能や僕が果たせる役割を丁寧に説明することで、意識が高い人や本当に悩んでいる人にアプローチでき、その後相談に来られることが増えました。例えば、今も警察から「特殊詐欺防止のキャンペーンをやっているが成果が上がらないので、一緒に考えてほしい」と相談されています。まだ具体的なアイデアは出ていませんが、こういった悩みを持つ人との接点を作る

ことが大事だと思っています。

仙台市の場合も、低層部にこういう相談が気軽にできる場所があると良いですね。まさにポリシーラボの機能がそこで発揮されるのかなと思います。言い忘れましたが、KIITO が神戸市役所の中にあったら便利だろうなと思うことがあります。実際には駅から少し遠くて、歩くと 20 分くらいかかるので、もう少し近くにあったら良いなと感じることもあります。もちろん少し離れている方がいいという人もいるかもしれませんが、やっぱり近い場所にあることも大事だと感じています。

(コーディネーター榎原)

ありがとうございます。内川さんはいかがですか。

(内川氏)

まず、私は KIITO でクリエイティブ思考を学びたいと思いました。普段、プログラムを作る活動をしているので、イベントの実施に一生懸命になりすぎて、前後の文脈を作りきれないことが多いなと感じています。良い活動にしたり、愛着を持ってもらうためには、イベントはきっかけに過ぎなくて、その間のプロセスが一番大切なんだと改めて強く思いました。

イベントは旗のようなもので、その旗を掲げた人を応援してくれる人がたくさんいることで活動が支えられていると思います。今回のラボ機能も、支えてくれる人を一緒に育てることが必要だと思いました。

(馬場氏)

まず、言葉がとても魅力的で、言葉の使い方がいろんな人を KIITO に引きつけているなと思いました。子どもたちやおじいちゃん、おばあちゃんのように、どんな施設でフォローしたらいいのかわからない人たちを楽しそうに誘っている仕組みが改めてすごいなと感じました。めちゃくちゃ勉強になりました。

山形のクリエイティブセンターQ1 を設計するときには、KIITO に随分と勉強に行きました。ただ、こんなに深いところまでは見られなかったもので、あの風景の背景にこんなことがあったのかと、とても勉強になりました。先ほど榎原さんもおっしゃっていましたが、みんな想像できましたよね。仙台市役所の 1・2 階の低層部にあんな空間があって、あんなことが行われていると、めちゃくちゃ幸せな雰囲気ですよ。ある種の答えや風景を見せてもらえたなと思います。

それを民間事業者が運営しようとする、ちゃんと企業を巻き込んでいくことが大事ですよ。ああいう活動が自然にやれるような雰囲気を仙台市役所が最初から出していて、そういうことができるルールやインフラを今から整えられるなと思いながら、とても具体的なイメージを持って話を聞くことができました。

面積的には 10,000 平方メートル以上ありますよね。それを何人くらいの体制でやっているのか、とても興味があります。仙台市役所の低層部と公園まで含めると、どのくらいの運営スタッフが必要で、どんな役割を担っているのか、組織について本当に興味深いです。

(コーディネーター榎原)

永田さんにお伺いしたいのですが、KIITO のご経験を含め、もし永田さんが一体的利活用エリアで活動するならば、僕だったらこんな形でやってみたい、仕掛けてみたいなのがありますか。

(永田氏)

そうですね、時間が足りなくて最後の方に入れていたスライドをお見せできなかったのですが、2021年にできた「KIITO:300」というスペースの話をしたと思います。今、KIITOの指定管理は3期目ですが、3期目が始まる時に、市から言われたのが、「KIITOが館内で頑張っているのは2期目まででよくわかったから、次は神戸の街全体を元気にする取り組みをしてほしい」ということでした。まちのプレイヤーの高齢化や地域活動のマンネリ化といった課題がまだ全然解決されていないので。KIITO:300にはそのための支援機能が2つあります。1つは子どもの創造的な学びの拠点で、もう1つは地域活動をしている人のためのクリエイティブな支援センターです。

さっき馬場さんがコメントしてくださいましたが、言葉の使い方については、コピーライターの岡本欣也さんが関わってくれています。JTの「あなたが変われば、マナーが変わる」という名コピーを作った方で、広告業界のスペシャリストです。僕も言葉はすごく大事だと思っていて、みんなデザインに走りがちですけど、言葉も同じくらい重要です。特に市民向けの施設では、言葉をちゃんと伝えることが必要だと思います。「KIITO:300(キイト サンマルマル)」も、なんでサンバクじゃなくてサンマルマルかというところ、『元気が集「まる」、元気が広「まる」』というキャッチコピーにちなんでいるからです。こういうちょっと工夫した表現が響くんです。このスペースには60種類くらいのボードゲームがあって、ボードゲームは創造教育に重要だと言われているので、東京の有名なボードゲーム屋の「すごろくや」さんにゲームのセレクトに関して協力してもらっています。

工作のスペースもあって、最初は自由に作らせていたんですけど、今はテーマ型の工作に方向性を変えていっています。例えば、今月は「○○の虫を作る」というテーマで、図書館で調べたり、オリジナルのワークシートを活用したりしながら子どもたちは思い思いに虫の工作に励んでいます。サポートスタッフたちは草むらや木を作ったりして、作品を展示する場所を作っています。ここでしかできない工作を考えることが大切だと僕は考えています。

また、子ども向けのワークショップも時々行っています。例えば、仙台でも先日実施した「ユメイエ。」という建築ワークショップでは、子どもたちが夢の家の模型を作るんですが、毎回子どもたちのソウゾウリョク(想像力と創造力)に驚かされます。他にも、プログラミング教育の成果発表のカタチとしてお化け屋敷を作ったり、夏祭りを企画したりしています。これらはすべてモデルケースで、公民館や集会場でもできるような活動をつくる意識で企画しています。

最後に大事なことは、キッチンの存在です。市役所の1階のスペースにもキッチンを設置することを考えてほしいです。キッチンがあることで、子どもたちのパーティーやイベントの仕込みができるようになります。例えば、パンじいやコーヒーじいたちが練習や仕込みに来る場所としてKIITO:300のキッチンは利用されています。KIITOをモデルとした秋田市文化創造館でもキッチンが活用されていて、人と人をつなぐ場になっています。だから、キッチンをこだわって作るのがいんじゃないかと思います。

キッチンの重要性は高く、みんなが自由に集まって活動できる場所を提供することが大事です。最終的には、空き家をパンじいたちの部室にして、そこでカフェもできるようにしたらいいんじゃないかと考えています。

(コーディネーター榎原)

ありがとうございます。子どもとか食とかのテーマに、クリエイターや企業にも入ってもらい、KIITOモデルを作って、それを他の地域でもできるように展開を促しているようなイメージだな

と。その理解で大丈夫ですか。

(永田氏)

そうですね、市役所の下で賑わいを作ることも大切だと思いますけど、もう一つ重要な役割があるように思います。神戸市から言われて、なるほどなと思ったんです。僕たちがここで新しいユニークな取り組みをしているのはいいけど、神戸のまちがどんどん疲弊して困っているんじゃないかと。まちを元気にしろよっていうお題をもらった時に、まだまだダメだなと思ったんです。

最近、空き家ゼミを通じて空き家を改修して、KIITO のサテライト的なものを作って運営し始めているんです。そういう取り組み自体も、KIITO に来れない人たちのために僕たちが出張って行ってサテライトを構えることの価値は十分あるんじゃないかと思っています。

仙台でプログラムを作るときも、一つは賑わいを作っているいろんな人が交流できる場所を作ること。そしてもう一つは、そこで得られたものを持ち帰って地域が豊かになるようなモデルがここで生まれることが大切だと思います。

(コーディネーター榊原)

ありがとうございます。内川さんも、チ・カ・ホやアカプラなどの公共空間を指定管理されているということで、日常の活動も含めてさまざまな取り組みを経験されていると思います。いくつか事例をご紹介いただけますでしょうか。

(内川氏)

私たち、チ・カ・ホとアカプラという2つの施設を運営管理しているんですけど、どちらも元々は道路空間なんです。今でも道路であることには変わりはないんですけど。チ・カ・ホを整備する時も、単なる地下通路を作っただけという強い意思が札幌市役所にも市民にもあったと思います。

右側のアカプラは、元々車が走っていた道路空間だったんですけど、三井 JP ビルの再開発に伴って作られました。私たちは今、地域の価値を高める活動をいろいろやっていて、特に地上のアカプラの方でやっています。私たちが運営にあたって大切にしているのは、「大切にしたい景色は何か」を考え続けることです。赤れんが庁舎の前に広がるアカプラで滞在する方々が日常的にのびのびと過ごせるか、またそこで生まれる新しい素敵なものが増えてほしいと思いながら運営しています。

社会実験の際にはイベントだけではなく、日常的に人が集まるためにどういう仕掛けが必要で、どうすれば居心地が良いと感じるのかを検証しました。その上で、デザインが生み出されているんです。さらに、日常的に使うのは地域の皆さんやこの辺で働くオフィスワーカーの方たちなので、社会実験をする時にはその方々にも参加してもらえる仕組みを作りました。こうして、地域の価値を高める取り組みを進めています。

さっぽろ八月祭は、新しいお祭りを作りたいという思いから始まりました。地域の人に参加してもらって、最終的には餅まきを始めるなど、地域の人たちが関わるイベントを大事にしています。大切にしたい景色を守り、新しい素敵を生み出すためには取り組みが必要で、その中で利用者や近隣の人たちが困らないように、きめ細かく調整をしています。

キッチンカーなども、この景色を守ってくれる事業者さんに出店してほしいと思っています。利用してくれる方も、チ・カ・ホやアカプラの風景を作る一員ですから、その意識を持って参加してほしいと考えています。

また、例えばこの写真は少年野球チームの子達がアカプラで反省会をしている景色です。一方で夜にはティックトックの撮影が行われているなど、様々なアクティビティが自然と生まれています。こちらは冬の写真で、札幌ならではの風景だと思うのですが、みんなが雪だるまを作り始めたりしています。

利用する方も含め、みんなでこの風景を大切にしたい、よくしたいと思っていると、使い方のバリエーションを増えるんじゃないかなと思います。

(コーディネーター榎原)

ありがとうございます。風景という言葉だけで、馬場さんにすぐ振ってしまうんですが。内川さんは大切にしたい景色とおっしゃっていましたが、利用者も含めて、新しい素敵な風景を作っていく一員なんだという話がありました。馬場さんが、そういう風景を作る上で、大切にすべきことは何だとお考えですか。

(馬場氏)

永田さんと内川さんの話を聞いて、風景という言葉がキーワードになっていることに驚きました。特に最近の若い世代は、ティックトックやインスタで写真を撮ることが多いので、自分がどんな風景の中にいるかという意識が高まっているんだと思います。素敵な風景、ドラマティックな風景、心地よい風景の中にいることを感じるようになっていけば、その背景を作ることが重要ですね。

誰が誰のために風景を作っているのか、その構図が大事だと思います。パースで一生懸命描かれていて、解像度が上がっているけれど、どんな人がどんな気持ちで来ていて、どんなふうに住んでいるのか。それを提供する側はどんな体制でいけば良いのか、作りたい風景から逆算して考えるのは良いアプローチだと思います。低層部を運営する民間事業者の公募の検討も始まると思いますが、その問いかけが大切だと思います。

僕も、インザパークや山形の Q1 を設計・運営する中で、どれだけグッとくる風景を作るかに対して敏感になることが必要だと感じています。お二人の話を聞いて、その点が腑に落ちました。

(コーディネーター榎原)

ありがとうございます。市民と一緒に風景を作る事業者って、基本的に行政が持つ土地を運営するために民間事業者さんが入ることになると思うんですけど、どうしても制限が多くて「あれもダメ、これもダメ」って感じになりがちですよ。でも、馬場さんの話を聞いて、そういう制限を乗り越えて初めてできる風景もあるんだなと感じました。

そのときに、行政側と運営を担う民間事業者の関係って大事ですよ。単に「これだけやってね」だけじゃなくて、運営する民間事業者がいろんな工夫やモチベーションを持つことが必要だと思います。新しい素敵を作ることが内川さんのモチベーションかもしれませんが、そういうチャレンジをするためには、運営を担う民間事業者と市の関係性や契約の仕方が重要になってきます。これはマニアックな話になっちゃうかもしれませんが、そこを乗り越えないといけないと思います。

馬場さんのこれまでのご経験から、今回の一体的利活用エリアで民間事業者と市との関係性や契約の仕方にどういった注意をすべきか、ポイントがあれば教えていただきたいです。

(馬場氏)

民間事業者と行政が面白い風景を作っていくためには、共犯関係が必要だと思います。よくあ

るパターンは、行政が決めたルール、つまり契約内容に従うっていうのが今までの慣例だったと思うんです。普通の行政ではそうですけど、今見せていただいたような多様なプログラムを作ろうとすると、行政と民間企業が協議しながら一緒にルールや契約内容を決めていくプロセスがとても重要だと思います。

行政が大きなフレームワークを設定して、「これだけは絶対実現する」という枠組みを決めて、その先は協議によっていろんなことを決めていく。それが条例化されるようなプロセスがあれば、新しい民間と行政との関係性が築けるんじゃないかなと思います。

永田さんの話を聞いてすごくいいなと思ったのが、行政が困っていることを一緒に考えるという点です。行政にとっても KIITO と付き合うことで得られるものがあるわけですね。今日話を聞いて、低層部を運営する民間事業者が政策立案や課題解決にも協力することができたら、すごくいいなと思いました。

(コーディネーター榊原)

ありがとうございます。風景の話と、行政と低層部を運営する民間事業者との関係性について、こうあるべきじゃないかという話がありました。坂本さんの方で、これまでのお三方の話を伺っての一言感想でもいいですし、コメントをいただければと思います。

(坂本氏)

ありがとうございます。今の馬場先生のお話に関連して、今後のスケジュールについてお話しします。令和7年度の後半から8年度にかけて、この低層部を運営する事業者を選定していきたいと思っています。我々役所としても、すべてをガチガチの契約書案で「これでできますか、できませんか」と進めるのはうまくいかないと考えています。

そのため、どうやってフレームワークを作っていくかが、これからの1年間で非常に重要な課題です。その中で、いろんな自由な発想やアイデアを取り入れつつ、責任分担をしっかりと定めていきたいと思っています。共犯関係という話もありましたが、お互いにパートナーシップを築きながら前に進めていきたいと思っています。

それから、質問が一つあります。内川さんに教えていただきたいのですが、今年のゴールデンウィークにプライベートでチ・カ・ホとアカプラに行ってきました。ちょうどアカプラでチューリップ祭をやっていて、地元の方や観光客の方が集まっていました。赤レンガ庁舎に続く通りが歩行者天国になっていて、プランターにいろいろな品種のチューリップが植えられ、キッチンカーも出ていて、コーヒーを飲みながら、ソフトクリームを食べながら、思い思いに過ごしている風景がとても印象的でした。

その中で、先ほどお話にあったように、単なるイベントではなく日常的な交流や滞留を高めるためにどのような工夫や苦勞があったか教えていただけるとありがたいです。市民広場でも土日ごとに単発のイベントが行われていますが、それを日常的な活動に高めるためのポイントや苦勞があれば教えてください。

(内川氏)

お越しいただきありがとうございました。チューリップのイベントは湧別町とのコラボでやっていて、毎年チューリップを3,000株提供してくれるんです。それを、札幌は春が遅いので、春の訪れを感じるきっかけにしたいと思って毎年実施しています。春の訪れを感じてもらえるように工夫しています。せっかく見に来てくれる方がいるので、毎年続けたいと思っています。

アカプラは一般利用の期間は6月から10月末で、11月から12月には雪が積もってしまいます。札幌は夏が短く、みなさんその季節を楽しみたいと思っているので、盛り上げることを意識しています。ただ、平日にはあまりイベントを入れていないんです。オフィス街に位置しているので、働いている方々が仕事の合間にリラックスできる場所であってほしいという思いがあって、イベントは少なめにしています。

でも、居心地がいいと感じてもらえるように、ちょっと気分が上がるキッチンカーを設置したりしています。キッチンカーはイベントというより、そこに来てもらって滞在してもらうための機能なんです。だから、イベントはあまり主張しないようにしています。

一方で、チ・カ・ホでは、365日イベントをやっているんですよ。そちらは常に人が集まっています、使い分けが大事だと思います。今回の一体的利活用エリアも、日中に賑わう空間と静かな空間の使い分けが必要だと思っています。市民の方と一緒に考えていけたらいいなと思います。

(コーディネーター榊原)

ありがとうございます。ちょうど今の内川さんの回答に似た質問がありました。「市役所にKIITOのような機能ができて、選ばれたクリエイターだけの遊び場になってしまうと、私のような普通の人は入るのが怖くなってしまいます。凡人が関わりやすい空間づくりのポイントや、凡人でもできることを教えてほしいです」という質問です。クリエイターやクリエイティブな活動が強調されると、一般の人が入りづらくなるのではないかという懸念もあります。一般市民にも使いやすい場づくりのポイントについて、永田さんの経験から何かアドバイスがあれば教えてください。

(永田氏)

まず、今日の僕の話が伝わってないなと思いました。「ちびっこうべ」のことも、クリエイターが先生になる部分しか見えていないのかもしれませんが、実際にはイベントには200人近くのボランティアが関わっていて、その中には高校生や大学生、社会人などクリエイターではない一般の方が多く参加しています。もちろん若いクリエイターや建築やデザインを学ぶ学生も含まれていますが、だから、みんなで作っているんです。もちろん、各店の担当者として建築家やデザイナー、シェフたちがクオリティの責任を担っている訳ですがそれだけではお店は運営できませんし、まちも運営できません。つまりみんなで作り、みんなで運営しているんですね。つまり、「ちびっこうべ」はクリエイティブの祭りなんです。祭りってみんなで作るものだと思うんですよ。

今回のポリシーラボの話ですが、ゼミの話の前に「ちびっこうべ」を紹介した理由は、こういう場所や施設を作る時には「祭り」みたいな活動が必要なんじゃないかと思ったからです。KIITOのオープニングの時にその考えがベースにあり、「ちびっこうべ」をこけら落としのイベントとして開催しました。そこから、クリエイターとの本当の関係が生まれ、集まったいろんな人たちとのネットワークが生まれました。それがその後の事業に繋がっていくんです。ゼミにも多くの若い大学生やクリエイターの卵が参加しています。KIITOの取り組みの全てが選ばれし有名なクリエイターとの事業になっているわけではなく、いろんな取り組みがあり、多彩で多様な方々と協働しています。それぞれの場面でいろんな人たちにいろんな出番があるんです。

それと、質問された方は凡人という言葉を使っていますが、関わろうとしない人に関わってもらうのは正直難しいです。でも関わろうとしているけど敷居が高いと感じる人にとっては、KIITOのような施設は関わり代だけだと思います。自分の興味や関心が見つかる多様なプログラムが

展開されているので、自分なりの関わり代を見つけることができるんです。だから、たくさんの関わり代を用意することが、私たちの仕事やプロジェクトというか、種の作り方のポイントだと思います。

(コーディネーター榎原)

関わり代について、もう少し具体的にいうと例えばどんなものがありますか。

(永田氏)

今言った通り、「ちびっこうべ」っていうのは一つの種なんですよ。その種は不完全な状態にそもそまなっていて、たくさんの人たちに関わってもらい、手伝ってもらわないと完全な形にはならない。つまり、僕たちだけで成り立つ事業ではないんです。ちびっこうべのような「でっかいお皿」を作ることがとても大事で、そのお皿ができると、関わり代の幅が広がって、いろんな人が関わり代ができるんです。さっきのパンじいに関わっているコミュニティカフェみたいに、子どもや地域の大人までみんなが参加するようなことも含めて、関わってもらえるチャンスや場がたくさんあるんですよ。

例えば、課題別のゼミなんかも、みんなが興味や関心に基づいて動いています。以前やったゼミでは、障害者福祉の作業所の問題について取り扱ったんですが、その時に、そのテーマにもものすごく関心がある若いクリエイターや学生がたくさん集まりました。さらに実際に作業所で働いているスタッフの方も多く参加されていました。そういう意味で、ジャンルやテーマ、規模などの中に関わり代のバリエーションがたくさんあり、それらのレイヤーが重なり合ってKIITOという総体が形作られているんじゃないかと思います。いろんな人が関わり合い、その中でまた新しい関係が生まれていくんじゃないかと思います。

(コーディネーター榎原)

内川さんは関わり代について注意していることはありますか。

(内川氏)

自分が自分がついていうのを言わないようにすることですね。夢中になりすぎると、自分が出てきちゃうんですが、それを避けるために、自分がやっている周りにもたくさんの人がいることを意識しています。質問の中で、地元の市民や関係者に関わってもらうのも大事だと思うんですが、市役所の職員が市民の一部として関わっているっていう考え方があるのは、前向きでとてもいいなと思っています。

この写真は、チ・カ・ホの作戦会議の様子です。市役所の皆さんと一緒にいる会議で、チ・カ・ホは普通の公共施設とは違って、一度作ったら形が変わらないわけではありません。隣接するビルとつながることで、その効果が発揮される施設になっています。そのため、今までとは違った賑わいが生まれることが期待されています。空間の稼働率が90%以上で、ビルの接続が増えると受け皿が不足するという危機感もあります。それに対して、自分たちが何をできるのか考えています。

市役所の皆さんがプレイヤーとして、仕組みの構築だけではなく実際にできることがあるかもしれません。ショーケースとして使ってもらえると良いと思いますし、その中で市民の方にも使っていただけるといいですね。札幌市も参加していたワークショップでは、運営事業者だけで考えるよりも、札幌市の違う部署の人たちやいろんな関係者が参加することで、違う使い方が生まれるなと思いました。市民が参画すれば、さらに盛り上がるワークショップになるでしょう。自

分たちが作りたい風景のパートナーとしっかり話をすることが大事だと思います。そのために、仙台市さんと低層部を運営する民間事業者さんがしっかりコミュニケーションを取ることが重要です。

仙台市と民間事業者の度量や夢、新しい風景を作りたいという思いをどれだけ受け止められるかが難しいですが、大事なことだと思いました。低層部を運営する民間事業者には、幅広いジャンルの方が必要だと思います。うちの会社もまちづくりの会社と言いながら、ほとんど中途で入ってきた人ばかりで、建築系や不動産系の人ほとんどいません。美術作家やジャグリングパフォーマーなど、全然違うジャンルの人が関わっているので、多様な視点で受け取ることができます。それ自体が関わりの機会になりますよね。

それぞれの人のネットワークが全く違うので、ネットワークが広がることで、市民活動を行う上で場を探している人と結びつけられるかもしれません。同じことをやっているからこそ分かることもあります。そうやっていくことで生まれるコンテンツが増え、多様性が育まれる場になるんじゃないかなと思います。

(コーディネーター榎原)

一体的利活用エリアの運営を単体の企業・組織でできるんですか？というコメントもありましたし、これまでの検討会の議論でも一つの企業だけでできることではないよねという話が出ていました。さまざまな施設の運営にも関わられている中で、馬場先生から一体的利活用エリアの運営を担う民間事業者の体制について、コメントいただけますでしょうか。

(馬場氏)

さっき、凡人は一体的利活用エリアに関われないんじゃないかというコメントがありましたが、一体的利活用エリアはとても広いので、ベンチに座ってぼんやり過ごすなど、何気ない過ごし方ができる余地は必ずあると思いますし、ただ過ごすだけでも風景の一部になるということだと思うので、安心してほしいなと思いました。

低層部の運営を担う民間事業者については、これまでいろんな議論がありました。場所をしっかりと運営するためには、イベントや不動産に関する知識がある人が必要ですし、そこで行われていることをもっと発信していくためには、メディアに慣れている人も必要かもしれません。今日の話を変えて聞いていると、来てくれる人を楽しませようというサービス精神が大前提になっている感じがします。それがメンタルインフラになるのかなと思いました。ただそれは会社じゃなくて、もしかしたら個人の特性によるところが大きいかもしれないなと思います。だから、楽しませることやエンターテインメント、サービスに長けた人が運営に関わるのがベースになっていて、その魅力を発信するためにメディアやシステムに強い人がいる、という感じがいいのかなと思います。本当のベースは、ジャグラーのようなメンタリティを持った人が中心になるべきだと思います。それを踏まえると、どこかの会社が一社で運営しますという形は、どうなのかなと思いますよね。

(コーディネーター榎原)

ありがとうございます。KIITO を運営している人たちが どんな人たちが職員でいるのかってすごく今気になってきました。

(永田氏)

まず、KIITO で大事なのは、施設管理部門と事業企画部門が完全に分かれていて、それぞれ違

う会社が担当している点です。僕らは実は施設管理にはほとんど関わっておらず、ひたすら事業企画を中心に取り組んでいきます。施設管理の方は阪急阪神グループの会社が維持管理してくれています。もちろん JV なので、パートナーシップを組みながら、適材適所でうまく組み分けてやっているわけです。もし両方やれって言われたら、不慣れな事業に対応するためにどこから人を雇い入れなければならなくなりますが、事業そのものの経験がない訳ですから管理すら大変だと思います。ですから、そこを明確に切り分けているのは正解だったと思います。

事業企画部門のスタッフは正社員が 8 人しかいないんです。アルバイトを含めても 14 人くらいです。韓国に似た施設があって、その施設は 100 人くらいのスタッフで運営していると聞いて驚きました。指定管理料が決められていて、そんなに潤沢ではないので、少数精鋭でやらざるを得ないんです。施設管理の方も数人のプロパーの人とパートさんを入れて 20 人くらいのチームで回しています。全体では 30 から 40 人くらいです。

事業企画には「キャンパー」と呼ばれるサポーターが 200 人くらい登録していて、彼らも企画にどんどん巻き込んでいます。馬場さんが「共犯関係」と言ったのは良い意味で使われたんだと思いますが、運営する民間事業者と行政の信頼関係が一番大事だと思います。この点で難しいのは、行政の担当者が何年か毎に人事異動で変わるということです。僕らは 12 年間 KIITO の運営を行っていますが、行政の担当者のチームは 4 回変わりました。信頼関係を継続して保つのは難しいですが、ブランディングとプロジェクト検証が重要だと最近感じています。

ブランディングは、エクスターナルブランディングとインターナルブランディングがあって、外向きも内向きも両方大切です。これをアルバイトスタッフも含めたスタッフ全員と役所の担当者や関係者全員に理解してもらうことが大事です。もう一つ重要なのが事業の効果検証で、この好事例が JICA のプロジェクト検証の仕組みである PDM（プロジェクトデザインマトリックス）です。これは、達成目標を共有しながら進めるもので、目標設定シートを一緒に作り上げる過程が秀逸で素晴らしい仕組みです。こうした仕組みをブランディングと合わせて導入することで行政の担当者との信頼関係を構築でき、いい状態に保つことができるのではないかと思います。

（コーディネーター榊原）

指定管理は基本的に行政が「こういう仕様や性能でやってください」と民間事業者にお願いして、そのためのお金も決まっています。そのため、評価も行政側が行うことが多いです。でも、馬場先生と永田さんの話を聞いていると、契約関係や役割分担があるにしても、一緒に作り上げていく感じが大事だなと思いました。検証の項目も一緒に考えていくことで、市民の関わり方をもっと増やせるんじゃないかと。民間事業者としてやるべきことだけでなく、市としても一緒に考えていけると思いました。

さて、時間もだんだん残り 5 分になってきました。質問やご意見をたくさんいただいているんですが、すべてにお答えするのは難しそうです。永田さんや内川さん、馬場さん、もしこれに答えたいというものがあれば、一つだけお答えいただけますか？

（永田氏）

行政職員について、KIITO のような人材をどう育てるかって話がありましたね。僕は研修が大事だと思っています。現場での経験が絶対必要で、場数を踏まないとこの分野の人は育たないんですよ。KIITO のスタッフも、現場で経験を積んだからこそできるようになったと思います。そして、その場数を踏む前に必要なのが研修だと思います。今日、僕は「風の人」としてきてい

て、この後帰らないといけないので、一つお土産を置いていければと思うのですが、研修はオファーをいただければ喜んでお受けし、再来しますよというのが私の置き土産です(笑)。それくらい言って帰らないと申し訳ないので。僕は今、群馬県庁や兵庫県で職員研修をしています。公民館の職員向けにも研修をやっていますが、考え方や課題へのアプローチ方法に関して困っている人が多くいらっしゃるの、クリエイティブ思考の研修を受けていただきたいですし、受けるべきではないかとすら思います。やっぱり研修を受けて、次に場数を踏むことでしか始まりませんので、お答えとしては厚かましいですが「また私を仙台に呼んでください」とお返ししたいと思います。

(コーディネーター榊原)

市職員だけではなく、「水の人」としては中間支援の方も含まれると思うので、それこそ現場で活動している NPO の方だったり、そういう人たちと一緒に永田さんの研修を受けられたらと思いました。

(永田氏)

群馬県庁では、県庁職員と地域の若い活動家が一緒になって社会課題解決のアクションプランづくりを行う研修をしています。今年 2 年目になるんですけど、実際に昨年度参加者が企画したアクションプランが実現しているので、とても有意義な場だと感じています。そういった取り組みを仙台市でもやるべきじゃないかと思っています。

(コーディネーター榊原)

ありがとうございます。内川さんは何か気になる質問がありますか。

(内川氏)

「沿道ビルオーナーの企業市民として魅力的なエリアに貢献していきたいと思います」というコメントがあって、拍手をしたいなと思いました。そういった想いをお持ちの方がいること自体が価値だと思うので。

(コーディネーター榊原)

あと 2 分ですが、今回市民の皆さんにこれまでの検討状況を、初めてに近い形でお伝えしています。検討会の結果などはウェブで公開しているんですが、来るのはだいたい関係者に近い人が多いんです。でも、今回のように全部をアーカイブして公開するのは初めてに近いと思います。ただ、今回やったから終わりというわけではなく、引き続き何度も続けていくものだと思います。今日はグラフィックレコーディングも作成していますが、工事中の仮囲いに貼っちゃえばいいんじゃないかという話も出ました。そうやってオープンにして、皆さんが今からプロセスに関わることのできる関わり代を作っていくのが基本かなと思っています。

最後にパネリストの方から一言ずついただいて、今回のシンポジウムを終わりにしたいと思います。

(坂本氏)

今日はありがとうございました。今日の話の中で「関わり代」という言葉が出てきましたが、これをどんどん広げていくことで、人口が減っていく世の中でも関わってくれる人を増やせるんじゃないかと思っています。単に行政と民間事業者と一緒に施設を運営するだけでなく、市民の方や NPO、さらには外から来る人も増やしていくことが大事だと思います。

また、これから低層部を運営する民間事業者を選ぶ過程では、何をやりたいかを明確にし、透

明性を保つことが重要です。先ほど、単独の民間事業者では難しいという話もありましたが、何をやりたいかを明確にして、「こういうことをやってほしい」と提示し、役所側としてもできることを示した上で提案をいただく。その上で最終形を決めていくというプロセスもあると思います。そのために一定の時間が必要ですので、気をつけながら進めていきたいと思います。以上です。

(永田氏)

はい、整備スケジュールを見ると、今日のトークセッションの5年後くらいですね。僕もその時には60歳になっていて、そのときにまだKIITOに関わっているかどうかはわかりませんが、もし続けていて元気だったら、何かのプロジェクトでKIITOとコラボレーションできたら嬉しいです。私が常に取り組んでいること、特にKIITOのプロジェクトで実践していることは、モデルを作ることです。仙台市がやろうとしていることは非常に重要なモデルを作ろうとしていると思います。残念ながら、KIITOには広場がないので新庁舎に広場があることは豊かなことだと思います。仙台市がこれから作り上げていこうとしている新しいモデルには、相当高いハードルがあると思いますが、様々な方々の力を結集し、そのハードルを越えていってほしいと願っています。これからこの魅力的なスペースや素晴らしい機能がどのように作られて、豊かに運営されていくのかを楽しみにしています。神戸からエールを送りたいと思います。

(内川氏)

今日はありがとうございました。今回の一体的利活用エリアというのは、仙台のまちで過ごす人々がまちを使って、育てていくっていう当事者になるきっかけを作る場所になるんじゃないかなと思います。タイトなスケジュールで、様々なハードルがあり調整も必要だと思いますが、それも新しいことを生み出すためのクリエイティブな過程だと思うので、それが形になると良いなと思っています。

(馬場氏)

今日はありがとうございました。面白い多くの学びがありました。プロセス自体が本当に重要だと思います。リアルとオンライン合わせて100人以上の方がシンポジウムに参加しているということで、そういう人が少しずつ増えていくことで当事者・プレイヤーが出てくるのかなと思うので、チャレンジする市役所というテーマはこれからも言い続けていきたいなと思いました。

(コーディネーター榎原)

少し時間が押してしまいましたが、市民の活動の場として、行政とコラボしていく話や低層部の運営を担う民間事業者のスキームの話など、様々な議論ができたと思います。もし分かりにくいところがあれば、後ほどもう一度動画も見ていただければと思います。これでパネルディスカッションを終わります。ありがとうございました。

(司会)

今日はありがとうございました。パネルディスカッションの皆さんも、本当にありがとうございました。2時間があったという間に過ぎましたが、これからも良い場を作っていきたいと思いますので、皆様のご協力をよろしくお願いします。

今日のシンポジウムでは、いろいろな参考になるフィードバックをいただき、本当に充実した時間でした。もう一度、登壇いただいた皆様に拍手をお願いします。本当にありがとうございました。

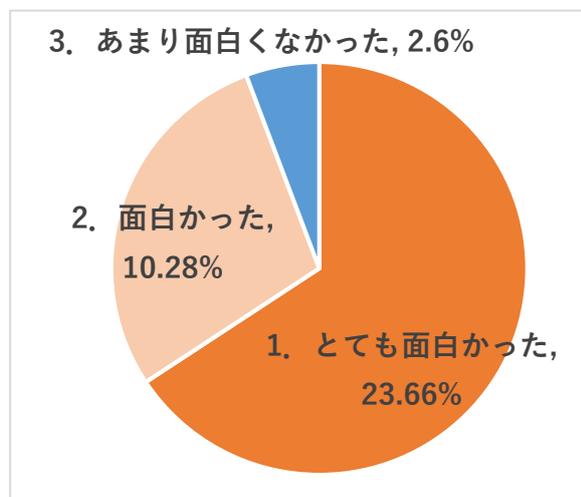
これをもってシンポジウムを終了いたします。本日は会場にお越しの皆様、そしてオンライン

でご参加の皆様、ありがとうございました。

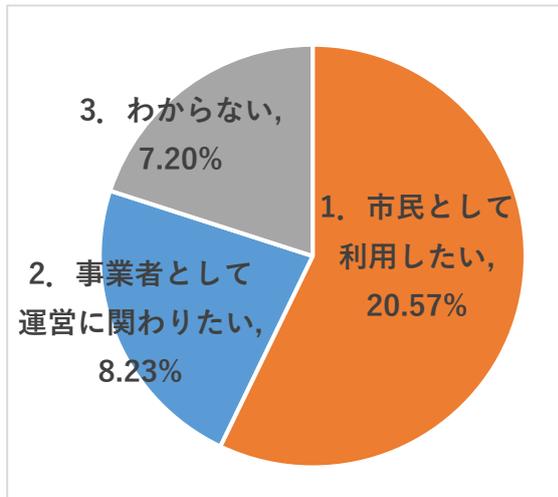
■低層部シンポジウム 参加者アンケート結果

回答数：35 件／回答方法：オンライン

問1 シンポジウムの感想



問2 今後の参加意向



- ・問1 シンポジウムの感想では、全体の約9割が「とても面白かった」「面白かった」と回答しており、参加の満足度は高かったと考えられる。
- ・問2 今後の参加意向では、「市民として利用したい」が約6割、「事業者として運営に関わりたい」が約2割となっている。

問3 活動の意向

<市民としての利用に関する内容>

- ・家族でのんびりしたい
- ・イベント利用も大事だと思いますが、大半を占める日常的な利用も念頭に進めて欲しいと思いました。
- ・参加できる機会があれば、市民として参加してみたい。
- ・ビブリオバトルやサークル活動での利用など、小さな企画で利用できたらいいなと思っています。
- ・様々なイベントがありそうなので、繰り返し参加できそうです。

<事業者としての運営に関する内容>

- ・市の職員さんの市役所を楽しむフェスティバルがあると面白いなと思いました。
- ・関係者と少しずつ活動に参加していますが、ジャズフェスの再構築（音楽家が生活していける文化が育った街のジャズフェスティバル）を実現したいと考えています。
- ・魅力的なエリアづくりに向けて、沿道ビルオーナーの立場からも継続的にアイデアを出し、地域の方々と関わっていきたいと思いました。
- ・市民と行政の対話の場。
- ・一体活用による広場で多様な活動が生まれる仕掛けは何かを探る実験的な活動をしたい
- ・Policy Lab の取り組みとして、市民とプレイヤー、行政、政治がつながるような対話のできる空間づくりをしてみたい。
- ・KIITO でやっているような子ども中心のワークショップがもしも実現するなら、個人として参

加したり、企業として協賛したりできるといいなあと思いました。

- ・また高校生の探究学習ができる場所、大人で言う「コワーキング」のような、大人の人たちと高校生が自然と交流できて、探求をさらに深める「コスタディング」？のような場所も、行政の入るビルだからこそできそうだなあと思いました。"
- ・地下の利活用も進むと面白そうだなと思いました。
- ・空間利活用に関わる申請窓口の一本化につき、弊社で何かお力になれることはあるのではと思っています。
- ・公園含め規模も大きく設備の整ったイベントスペースが街中にできることになるので県外からも集客できるような大きなイベントを組んでみたい

問4 自由記述

<シンポジウムの開催に関する内容>

- ・市民に解放される場所を真剣に考えるのは、素晴らしいと思います。他の街の先進事例を勉強できる、このようなシンポジウムは、何度も開催して、ドンドン知恵を集めることが大切ですし、すぐに使わなくとも知恵はじゃまになりませんので、多いほうが良いはずです。次回もこのようなシンポジウムが開催されることを、大いに期待したいと思います。
- ・パネリストの方々の発表内容やディスカッションの質が非常に高く、とても勉強になりました。ご準備にあたられた仙台市職員の方々お疲れさまでした。
- ・司会の方の質問、指摘が的確で聞きたい情報を隈なく聞けた。今回のような場を設けること自体がまず素晴らしく、今回の内容を今後どのように活かしていけそうかまで考えていたのが市外の間には羨ましく感じた。
- ・講演頂いたプロフェッショナルの方々のお話を聞けるだけでも有意義な時間となりました。ありがとうございます。
- ・「面白いまちを作ろう」という気概を感じられるとても楽しいシンポジウムでした。また、KIITOのことを知れたのは個人的に大きな収穫でした。
- ・第一線で活躍されている方のお話で、内容がたぐさんでした。まだまだ、楽しみな内容があると思いますので、継続して開催していただけると、もっと盛り上がっていくと思います。
- ・馬場さんや内川さん、永田さんの話を聞くには時間が短すぎた。
- ・とても聞きやすく、目指している姿がよくわかる構成でした。ありがとうございました。
- ・貴重な講演ありがとうございました。
- ・とても楽しく学ばせていただきました！
- ・継続的に参加したいと思いました。ありがとうございました。
- ・KIITO の活動内容、コンセプトもすべて、日頃こんなことやれたらいいと考えてモヤモヤしていたことにビタリハマっていて、目の前が開けた気がしました。ぜひ一度視察や研修を受けてみたいので、企画してもらえないでしょうか。
- ・一体的利活用エリア、庁舎低層部に何ができるのか、何を目指しているのか掴めなかった。
- ・仙台市の今後の運営方法や低層部のあり方について、もう少し具体的なディスカッションして欲しかったです。仙台市が何をやっていくべきなのか、パースに対するアドバイスなどがパネリストからあるべきだと感じました。

<低層部を運営する民間事業者に関する内容>

- ・運営事業者の選定にあたっては、皆さんおっしゃる通り単一団体では難しいと考えます。新庁舎前の盛り上げにあたっては、NPO 団体様の有り余る素晴らしいアイデアも必要ですが、そこに惜しみなく資本／資産を投入できる民間の仲間の力も必要だと感じました。
- ・発表、議論が非常にクリアで本当に本当に勉強になりました。ありがとうございました。仙台にも KIITO のような組織を作れるといいですね。やっぱりそういう場所の利用を作り出す組織は重要ですね。またの機会を楽しみにしています！

<一体的利活用エリアに関する内容>

- ・これから数十年使われることになるので、ダイバーシティの推進を掲げる仙台市として、多様な活動を受け入れられるような自由度の高い空間になれば良いと思いました。また機会を見て開催してほしいです。
- ・紀尾井町にあるヤフーのラウンジにキッチンがある、フラットなスペースのイメージが低層部にあると良いです。
- ・今後本庁舎低層部の利活用の具体的なイメージができ、よりいい場をつくっていけるよう到来ることから始めていきたいと思えました。

<その他>

- ・自分も、関わりびと、になれる場となってほしいし、自分自身もいろいろなことに興味を持ち、行動できる凡庸な市民になりたいと思いました。
- ・札幌が類似の事例としてわかりやすかった

■低層部シンポジウム Slido に寄せられたパネリストへの質問・意見

	質問	いいね数
1	私は心配性です。市庁舎にキイトのような機能ができて、「市に選ばれクリエイター（神々）の遊び場」になっては、私のような者は怖くて入れないと思います。「凡人」の関わりやすい空間・場づくりのポイント、凡人にできることを教えてください。	4
2	地元の市民や関係者に使ってもらおうというのも大事だと思うのですが、市役所の職員さんも一番の市民プレーヤーな気もするので、何か市役所の職員が自発的にやってみたいこと、楽しみたいことが施設の周辺にあらわれても面白いなと思いました。市役所の職員が楽しんでる風景が一番市民にも面白さが伝わる気がしました。	4
3	とても素晴らしい取り組みだと思いました！お金の流れを教えてください！市役所が払うんでしょうか？	3
4	永田様 「水の人」としての行政職員に求めたいものは具体的に何でしょうか？	2
5	行政課題を「楽しさ」を入れながら解決していくことが素晴らしいと思いました。行政に取り込む、行政を巻き込むコツがあれば教えていただきたいです。	2
6	仙台のキイトとなる人たちは、どうすれば生まれるのでしょうか？	2
7	冬季の天候が厳しい仙台ような地域では「開かれた空間」での活動に難しさがあると思いますが、そのような条件下で市民参加を促す仕掛けについてお聞きしたいです。	2
8	仙台市の考える「大切にしたい街の風景」を教えてください	2
9	「低層部を民間の力で」というコンセプトは素敵だと思いますが、1つの委託団体が全ての空間を複数年にかけて管理することになるのでしょうか。それぞれの機能を複数の民間団体が担う、あるいは随時さまざまな団体が利用できる空間になるなど、私たちがどんな関わり方をできるのかイメージをお聞きしたいです。	1
10	素晴らしい取り組みに感動しました 行政からの課題持ち込みはバラバラでkiitoにくるのでしょうか、行政側である程度とりまとめるような窓口・部局などがあるのでしょうか？	1
11	このエリアが夜も賑わうのは素敵だと思いますが、新市役所の低層部は夜も入れる空間になるのでしょうか。	0
12	永田さんに質問です。KIITOの活動は多くの若者(小学生など)が参加されるとおもいますが、例えば地元の小学生を巻き込む仕掛けはあるのでしょうか。	0
13	一般的に、「アイデア」と「実行」の間に高いハードルがありそうですが、クリエイティブセミナーで出てきたアイデアを実行に移しているのは、何が（どこが）原動力になっているのでしょうか。	0

	質問	いいね数
14	活動が広がっていくという点では、今検討されている一体利活用エリアの外側に広がっていく、まちへの波及効果や連携まで、今後の可能性がありそうですが、いかがでしょうか。	0
15	プラスクリエイティブはひとつの社会課題に対してひとつのクリエイティブなアクションで解決することで、まちを長い目で見た時に将来にとっても影響力のある取り組みだと思います。規模の小さい地方都市で官民がまちの将来の視点を育てるにはどんな工夫の可能性がありますか？	0
16	誰でもサークルを気軽に作れるようになって、色々なサークルが生まれては消え、一部は長く残るような社会になったら面白いと思うのですが、このような社会をどう思いますか？また、実現に必要なのは簡便な制度なのか、サポート組織なのか、何だと思いますか？	0
17	人を繋ぐことによる、まちづくりの可能性について、大変勉強になりました。一方で、交流が得意な人、得意ではないけどきっかけがあればできる人の他に、そういうことが得意でなかったり、できない人がいると思いますが、交流できない人に対して、公共的なサービスや空間がサポートできるのか、参考になる取り組み事例はありますか？	0
18	水切り大会をしたいとか、コーラの早飲み勝負をしたいみたいな、しょうもないことをしたいと思っている個人が、こういう企画に募集をかけられるようにするにはどうすればよいでしょうか？企画が成功しても失敗してもよくて、集まった人の意見を取り込むうちに最初のものから変質しきった企画になってもいいんです。誰でも主催者になれたらと。	0
19	イベントのボランティアの集め方とか、プロモーションの秘訣とか事例とか聞かせて下さい	0
20	都会では母数が多いので、皆に開けた場所にすごく価値があると思いますが、都会ではない場所では皆に開けた場所が誰からも使われていない光景をよく見かけます。再編や開発にどれぐらいターゲット論が必要だと感じていますか？	0
21	まちや地域によって市民の生活感やライフスタイルが違うと思います。その地域の市民の過ごし方に合った光景作りには何が必要だと考えていますか？	0
22	パネリストの方々からたくさんの印象的・刺激的なキーワードを頂きました。沿道ビルオーナーも企業市民として魅力的なエリアづくりに貢献していきたいと思いますが、期待されていることがあればコメントください。	0
23	仙台市の事業でこれは面白いことやってると思われるものありますか？	0